

第12回伊達市総合教育会議 会 議 録

1 日 時

開 会 令和5年6月22日(木) 15時00分
閉 会 令和5年6月22日(木) 16時00分

2 場 所

市役所本庁舎 3階第2・3会議室

3 出席者氏名

伊達市長	堀 井 敬 太
伊達市教育委員会教育長	影 山 吉 則
委 員	早 瀬 芳 宏
委 員	平 田 賢 弘
委 員	岩 本 秀 一
委 員	大 西 稚 子

4 欠席した教育委員の氏名

なし

5 会議に出席した職員の職氏名

市長部局	
企画財政部長	岡 村 崇 央
企画財政課長	水 野 一 英
企画調整係長	三 浦 正 貴
教育委員会	
教育部長	櫻 井 貴 志
学校教育課長	今 藤 康 之
生涯学習課長	上 山 昭 二
図書館長	阿 部 博
指導室参事	本 所 章 宏
学校教育課企画総務係長	渡 邊 純 一

開 会 （15時00分）

◎水野企画財政課長

本日は、お忙しいところお集まりいただきまして誠にありがとうございます。ただいまから、第12回伊達市総合教育会議を始めさせていただきます。本会議は「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第1条の4第1項に基づき協議するものです。それでは、これより先の進行は堀井市長よりお願いいたします。

◎堀井市長

それでは、さっそく議事を進めさせていただきます。

本日の会議に付す事件は、協議第1号の1案件です。皆さまから様々なご意見を賜りたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

それでは、協議第1号「伊達市の教育行政の取組について」でございます。

では、私から説明をさせていただきます。本日の配付資料の市政執行方針の3ページにありますとおり、「子どもの笑顔が真ん中にあるまち」ということを市政執行の基本理念といたしまして、7つの柱を記載しております。その中でも1丁目1番地として子どもたちの自信と笑顔があふれるまちづくりというところを掲げたいと思っております。伊達市の将来を担う子どもたちが豊かな人間性を育み、自分らしくいきいきと学び、様々なことに興味・関心を持って意欲的に取り組める環境づくりが重要であると私は考えております。また、子どもたちが夢や希望を叶えるためのチャレンジを支援するとともに、それらの学びを地域全体で応援できる意識の醸成と教育環境の充実をさせたいという思いがございます。

ざっくばらんに言いますと、伊達はいいところがたくさんありますし、コロナがあったということもあって、リモートでも勉強できる環境になっていますし、離れていても、必ずしも対面ではなくても教育を受けられるような環境になりつつあります。だからこそ伊達でしか体験できないものとリモートを使ってやれること、これらを合わせて付加価値の高い伊達ならではの教育、これを目指していきたいという思いがあります。

例えばどんなものというところですけども、もちろん基礎学力の充実というのは、その通りだと思っていて、今もやっていると思いますが、習熟度別学習、それぞれの個人にあったアプローチの仕方を入れることによって、基礎学力の定着をさせていくというのはもちろんですし、先程申し上げた対面だけじゃなくてもできるということに関係してきますけど、今DXと言われているように、子どもたちの能力と、実際にどのようなところを克服すれば学力が上がるのかということ、まさに教育のデータなどを使って、子どもたちの弱いところを本当にピンポイントにやっていくICTを活用してできるような分野もチャレンジできるのではないかなと思っています。

あと、伊達は退職された先生方が多くいるまちだと私は思っていますが、人材の宝庫だと思っていて、そういった方々を活用できる土壌があるので、先程の習熟度別学習に退職した先生に入ってくださいとか、もしくは学校の教育をサポートしてくれる一員として入っていただくとか、そういうことをもっと活発にすることによって、子供に対して細かな教育体制を作っていけるのではという思いがあります。

その他、伊達は自然環境が豊かですので、SDGsやカーボンニュートラルと言われているとおおり、持続可能な環境を意識した教育を受けていった方が良いかなと思いますので、伊達環境に配慮し、考えるような教育に触れさせてあげる、また、伊達は農業、漁業が

盛んですので、教育に入れ込んで体験させるなど、学校の勉強だけではなく、知識・経験も混ぜ合わせて子供が真の意味で強く生きて行けるような教育環境を伊達市は提供できるのではないかと考えています。

先程申した付加価値の高い教育活動と言ったのは、人口は減少していますけれども、そういった中でも北海道の中からとか近隣の市町村から伊達にという人口の取り合いみたいなことは考えていなくて、本当に付加価値の高いものを見せられれば、それこそ東京圏からとか関西圏からとか人が来てもらえるような魅力的なまちだと思っているので、私の見ている方向は北海道内ではなくて、もっと全国であるとか全世界という視座で伊達の教育を持っていきたいという強い思いがあります。夢は大きくというか、理想は高く、それでやっぱり伊達でしか受けられない教育っていうのは、こういったことなんだなということ全国に全世界に発信していくことによって伊達に住みたいなど、伊達に住んでも子どもの小学校中学校高校と上がっている時も安心して学習環境も保てるまちなんだなと思っていただけることが一番の人口減少対策になり得るのかなという風に思っています。

今、勉強面の話ばかりしてしまいましたが、それこそAIに仕事が取って代わられると言われている時代の中で、本当に真の意味で子どもが強く生きていける力が必要だと思っています。そういうこともあって、先程お話しした内容も繋がっていると思うんですけども、既存の教科の枠組みだけではなくて、様々なことにチャレンジできるような意識というのを子どもたちに体験してもらいたいなという風に思っています。これからもっとも経済的にもシュリンクして行って、世界全体と戦っていかなければならない時代になっていく中で、子どもの真に生き抜く力はすごく大事だと思っています、まずは何事もやってみるといって、既存の教科の枠組み以外でもやらせたいなと思っています、資格を取ってみるとか、既存の教科だけではない知識でやっていかなければならないこと、本当に今の社会の課題って横断的な課題多いじゃないですか。何か一つの枠組みだけで物事を考える時代は終わっていると思うので、複数の事を組み合わせて考えられるような子供を育ていきたいと、ですので、そのために資格みたいなものを一つの切り口かなと思っていますし、あとアクティブラーニングとか課題探求型の学習をもっと入れて行って、子供が本当に複合的に教科の枠組みを超えて考えられるような、そこでキャリア教育とかもやっていきたいなと思っています。

ただ、職業体験で終わるキャリア教育じゃなくて、先程申し上げたように、例えば私が昔仕事で行っていたところで、20人くらいしかいない小中の施設一体型の学校があったんですけども、そこでやっていた取組が、模擬株式会社という取組を広島県のある学校でやっていたんですけども、どういうことをやっていたかという、中学3年生までと小学1年生から6年生まで、これは合わせて20人くらいしかいなかった本当に山村の小さな学校だったんですけども、そこで児童生徒が1年間かけて自分たちの経済活動をして、物を作ったり売ったりとやってやるんですね。模擬株式会社って言うとおりに株式を発行するんです。年度初めにその会社の年度計画を立てたり、定款を作ったり、年間の事業計画を立てたりするんですね。本当に小さなお金ですけど、千円とか2千円とかの株を発行して、地域の人に買ってもらいますと、それを事業資金にして、物を調達して、ちょっとしたコースターを作るとか、お祭りの時に作るものとかも自分たちで作ると、実際の原料コストをちゃんと計算して、作って、売っていくと、1年間の事業活動をやるわけです。最後の3月の時の授業が参観日なんですけど、株主総会って名前でも1年間の事業計画をそのとおりでできたかどうかを大体中学3年生の子が社長になるんですけど、社長さんから株

主の方にご挨拶して、その後財務部長がその1年間かけてどういう営業成績だったかというのを説明して、営業部長である小学校6年生の子どもが自分たちのやった活動がこうだったことに苦労しましたと話したり、それで最終の授業の中で1年間の活動した経験を伝えるんですけど、今申し上げた模擬株式会社って会社経営されている方だったらわかりますけれども、子どもの頃って会社経営ってどういうものかわからないですよ。大人になってから事業を起こそうと思って、こういう知識が必要なんだとか、大人になってから出てきても高い志が無いと、例えばベンチャー企業を起こそうと思っててもチャレンジしにくいと思うんですよ。だから子どものうちからそういうふうに事業活動というものはこういうものなんだ、お金稼ぐってというのはこんなに難しいんだということを教科の枠組みを超えてやっているキャリア教育の現場を見たんです。それが必ずしもこれをやりたいというわけではないんですけど、そういういい事例とかもあるので、まさに子どもが生活の中で社会のサイクルが分かって、教科の枠を超えてかけがえのない経験をする。こういう体験を教育の中でもしていきたい。

今申し上げましたけれども、これを全部一足飛びでできるというのを思ってないですけども、例えば私の夢はそういうことで、本当に伊達でしか体験できない教育、伊達でだったら子どもを育てたいなと思わせるような教育のプランニングをしていけたらいいなとそういう場を提供していけたらいいなと、伊達に来た子供は学力も高いし、これから将来に向けて自己肯定感も高いし、将来に向けて何かやろうというグーグルの社長みたいな子が伊達からも出てくるという風にできたらいいなと思います。

そうした時に、郷土愛ってすごく大事だと思っているので、だて学の中で伊達の事を学んで伊達に対して色々提言していくというのをすごく大事だと思っています。私はこういう仕事をさせてもらっていますけれども、まちをみんなで作っていくというのはすごく大事なので、だて学の中で学んだものをただ受動的に受けて、伊達っていいなと感じるだけでなく、伊達に対してこういうまちにするためには、もっとこうした方がいいとか自分たちのアクションとして、こういう風に行動を変えて行った方がいいとか自分事として捉えて、アウトプットしていけるような、そういっただて学の最終系にできればいいなという思いもあります。それも小中高、ちょうど開来高校もありますので、初等教育と中等教育と一貫してだて学というのを構築出来たらいいなと思いますし、先程言ったキャリア教育も小中高一貫でキャリア教育を体系的に整理できて、本当に子どもたちがいきいきとのびのびと育つようなまちにしていきたいなという思いがあります。

あと、部活動とかも、勉強という話にフォーカスしてしまいましたけれども、それが部活動であってもいいと思うんですよ。子どもには得手不得手があるので、いろんなことにチャレンジして自分の可能性を見つけてほしいと思います。今、部活動も地域人材の活用等をしながら、地域移行も先行的にやっていますので、どんどん部活動の面も子どものチャンスの一つとして広げていけたらなという思いはあります。

また、いじめの対策とか不登校も出てしまう可能性はあるのかなと思います。ただ、実際に不登校になるとか、いじめが発生するということを未然に防ぐ仕組みと、今もLINE相談等もやっていますし、先生方に対して、いじめられていますとか家でこういう問題がありますとかっていうのを伝えるのはすごくハードルが高いことかなと思うんですけども、そうではなくて、もっと子どもたちがハードルを低く気軽に相談できるような体制ももっと構築できたらいいなというふうに思いますし、もし不登校になってしまった後も、適応指導教室等の場所によって子どものフォローができて、学校に復帰したい子であればそれ

を後押しできるような体制を構築していきたいなど。ですから本当に子どもに優しいまち、先程申し上げた子どもの笑顔が真ん中にあるまちというのを申し上げたような事を複合的に、全部いっぺんにするというのは難しいかもしれないですけど、ひとつひとつ積み上げていって、伊達で子どもを育てたいとか、子ども自身が伊達で学んでみたいなどと思ってもらえるようなまちにしていきたいと思います。

それでは、教育委員の皆さまに、それぞれのお立場から忌憚のないご意見を頂戴いたしまして、教育行政の取組について私も考えてまいりたいと思いますので、ご意見をお聞かせいただければと存じます。

◎早瀬委員

早瀬と申します。教育委員3期目となります。今お話をお聞きしまして、子どもの笑顔が真ん中にあるまち、その一つ目に子どもたちの自信と笑顔があふれるまちづくりということで、今の子どもたちに一番欠けているもの、自信が無いように見受けられます。自信というのはこれまでの経験ですとか、その経験をするために挑戦とかを積み上げて自信ができるのかなと思います。教育行政執行方針にもうたっていますけれども、一つ目に自立ということで、たくましくしなやかな子どもたちを育てたい。今市長おっしゃったように、子どもたちもメニューがいっぱいあって忙しいですけども、この伊達のフィールドを通して、それぞれの世代にあった挑戦みたいなものを工夫して体験させてあげて、少しずつフィールドの中で伊達を学びながら、いろいろな経験を積み上げていくような教育があってもいいんじゃないかなというのは思っております。

◎堀井市長

自信が無いという話もありましたので、自己肯定感の部分ですね。

◎早瀬委員

今はインターネットでいろんな情報が入ってきますが、自立ってというのは自分で考える、自分で決める、決めたことに責任を持つ。ということかなと私は常々思っていますけれども、どこかみんながこう言っている、みんながこう考えている、みんながこうやっているそれで上手くいかなかったら社会が悪い、あいつのせいみたいな風潮が見受けられて、そうではなく自分で考える、決める、責任を持つということを体験できるようなプログラム、そういう機会を与えられたらなと思っております。

◎岩本委員

岩本と言います。教育委員3期目となります。市長のお話を聞かせてもらって思いましたが、先生方の働き方改革の問題があって、運動会を縮小したり、大人の都合で子どもの活動が逆に縮小している印象がすごくあって、先生方が忙しいのは間違いないし、でもそのために子どもの活動を減らすのではなくて、マンパワーを増やしてほしいと常々思っています。人がいないから忙しい、大変だからあれを減らすこれを減らすのではなくて、市長おっしゃったように、伊達ってOBの先生がいっぱいおられるまちなので、人が増やせたら、さっき言った株式会社も伊達小レベルだと不可能だと思いますが、課外活動みたいなものでやるにしても、そこにも人が必要だし、最後に行きつくところはマンパワーかなと思うんですよね。伊達市は他のまちと比べて、そういうところに充実していて、学校の先生も最後は伊達で仕事をしたいと思うような先生が出てきてくれたら、子どもたちも連れて来てくれるかもしれないし、教育って市の魅力の一つだと僕は思うので、そこに独自性みたいなものがあつたらいいなと思うんですよね。

あとは、6、7年前から、この辺の中学校と最近では開来高校で性教育の講義をさせて

もらってますけど、その資料の中で性の悩みを誰に相談しましたかという項目があるのですが、60%以上がネットなんです。そして、親16%、家族が19%、学校の先生が1%。ほとんど学校の先生は相談する人がいない。でもこれもやっぱり学校の先生が余裕がなくて、子どもたちに向き合う時間が無いからだと思うんですよね、だからそういう意味でも、もっとこう本当のゆとり教育って、子どもの授業のゆとりがあるのではなくて、学校の先生がゆとり教育かなと思うので、そういうところが解消できたらいいなと思います。

◎堀井市長

大人の都合でというのは、まさにそのとおりかなと思います。全部が全部は難しいと思いますが、子どもに何か決めてもらって、子どもの決めたことを大人が叶えてあげるという面もある程度あってもいいのかなと思います。ある程度年齢を重ねてくると、自分で判断できることもあるので、例えば運動会を1日ばかりでやりたいとか、既存には無い部活動を新設してほしいなど、子どもの意見を聞きながら決めていくというのも大事なのかなと今のお話を聞いてすごく感じたところです。

あと、教育が市の魅力って、私もすごく思っていて、教育という無形のものだからこそ、すごく大事なものであり外に対して響くものかなと思います。どうしても義務教育って全国どこでも一緒と捉えられがちですけど、10年、20年前に東京都杉並区で塾と提携して先進的にやりましたけれども、それで学力も上がりましたというのがあった時に、杉並区に住みたい移住者が多かったということがあるので、教育ってそこに住みたいという思いに相関があるというか、教育が市の魅力というのはすごく響きました。

◎平田委員

平田と申します。教育委員3期目となります。今、市長のお話をお聞きしまして、教育の話はふたりが話してくれたので、その通りだと思いますが、教育が大人の押し付けになっているんじゃないかなというのはいくつかあって、だて学もそうなんですけど、結果がなかなか見えない部分もあって、将来的に伊達で良かった、伊達を学んで良かったとなくしてくれればいいんですけど、だて学をやることによって既存のできていたものができなくなる、先程おっしゃったように運動会が半日になるとか、鼓笛が無くなるとか負の面が出てきている。捨てるものあれば、捨てていかなければならないものもあって、それが果たして子どもたちにとってどう働いているんだろうかってところが正直僕は見えない中でやっているなど。

それを踏まえた上で、笑顔であるまちというのが現状笑顔である必要があるのか、将来的に行きつくところが笑顔なのかということと、どこに比重を置くべきかというのを模索しながらというのが正直なところです。なので、子どもを中心に捉えるのであれば、子どもの意見をきちんと拾いながら、例えば運動会のお昼ごはんをみんなで食べておいしかったという話は未だにありますし、鼓笛にしても鼓笛でしかできないこともあったわけで、もちろんだて学も大事だとは思いますが、大人としてはこういうことをやってほしいのがたくさんありますが、やればやるほど捨てていかなければならないものもあるので、その部分とのバランスがとても難しい、先生方の働き方改革もあるし、部活動の地域移行にしている中で、土日目いっぱいできるわけでもない、そういう中でいかに子どもの笑顔を真ん中にしていけるかという部分でみなさんと話し合っていきたいと思っています。

◎堀井市長

捨てていかなければならないものもありますし、鼓笛の話はまさにそうだなと思って、子どもが選んでいるわけではなくて、大人の都合でやめますということで胸も痛む言葉で

すし、考えなきやだめだなと思いました。

◎大西委員

大西といいます。教育委員1期目です。みなさんおっしゃったことはその通りだなと思って聞いていました。子どもの笑顔が真ん中にあるまち、本当に素敵なことだと思いますし、本当に笑顔で元気で楽しく育ってもらえれば、私はそれが1番だなと、強く生きていくことが1番だなと思っています。

仕事柄、小さいお子さんとお母さん、お父さんがよくいらっしゃるんですけど、子どもがこれとこれが欲しいと、お父さんは割と子どもを尊重してるんですけど、お母さんは好きなものを選びなさいと言うんですけど、それは高いからだめ、それはお家にかざってもきれいじゃないとか、結局子どもが好きなものを選べなかつたりというのがありまして、そういうのを見てると、私は自分で選んだものを買っていてももらいたいなと思うんですね、そういう大人になってほしいと常々思っています。これがいいとかちゃんと選んで自分の言葉で伝えられる子どもを、大人が阻止してはいけないというか、全部が全部そうだねというのはいけないと思うんですけど、ダメなものはダメだとはっきり言うべきだとは思いますが、花を選ぶってちょっとの事だと思うんですね。

これから小さい子どもが大きくなって行って、将来出て行く時に自分の言葉で親には伝えると思うんですけど、やっぱり第一にその言葉を信じてあげて、ダメな時はダメだと伝えられるという大人も欲しいなと思いました。子どもも大事なんですが、その子どもを伸ばしてあげられるような大人、先程の話にあった退職された先生と子どもだけではなく親も結び付けられるといいと思いました。

◎堀井市長

やはり大人側の力量も必要だと思いましたし、子どもが伸びるか伸びないかは大人の責任の部分も多いので、それも引き出せるような大人側の意識も必要だと思いましたし、また、先程のお花の話で選んで子どもが持って帰って、イマイチだったなという失敗の体験も大事だと思うんですね、チャレンジしてみてそれがダメだったから、何がダメだったかなと考える事も一つの経験ですし、そういう小さなところでも失敗しておけば、大きい失敗も無くなると思いますし、それも経験だと思います。

◎影山教育長

私の感じたことといたしましては、やっぱり今回こういう場を設けさせていただいたことは良かったなと思っていて、新しい市長をお迎えして、教育行政に望むことをおっしゃっていただいて、それを教育委員さん含めて我々事務局側も一緒になって受け止めて、普段なかなか教育委員さんも何かの案件について良いか悪いかって判断をしていただく場が普通なんですけれども、今回このようにそれぞれの教育観を踏まえながら、市長の方針に基づいて、それぞれ自分たちがお考えになってることを出し合って、今みなさんのお考えを聞いて、改めてそういう風に考えていらっしゃるんだなという事を理解できて、とてもいい場になったと私は受け止めております。

あと、それがベースにあるんですけど、市長が選挙の時から子どもの笑顔が真ん中にあるまちっていうフレーズをよく使われているというのを聞いて、就任されてからもお話をされていて、私としては、今、大西委員が言われたことかなという受け止めを持っていて、私の言葉から受け止めていたのは、大人の責任と覚悟の問題かなと私自身は受け止めてました。やはり、子どもを笑顔にできるかどうかは大人次第、結局子どもが自らなる可能性っていうのは極端に低くて、まずは大人、一番身近なのは親かなと思いますけども、そこ

がどういうふうに取り組んでいくか、方針を持つことがすごく大事なんだろうと受け止めました。だから、私たち教育行政の側からすると、改めて教育行政の責任というのを保護者、学校の先生方を巻き込みながら考えていく一つの改めてのリスタートになるかなと受け止めていました。

市長の株式会社の取組の話を知って思ったのは、たぶん上手くいかないことの方が多いのかもしれないなと思ったんですね、子ども自身の中で。そういった時に今なかなか失敗できる場が無いというか、世の中に出て失敗したら人生終わるくらいの勢いで、命を絶つ若者もいますけれども、そういう場面になったりとか、ちょっと何かあったらネットで炎上することが怖くてビクビクしたりとか、ネットの評価に一喜一憂したり、そういう子どもたちの状況があると思うんです。

家庭も含めて子どもたちが育っていく場の中で、学校もとりわけだと思っただけで、失敗できる場って大事だと。私は高校の教員を長くやっておりましたので、高校の現場で行けば挫折感を味わってもらって、小学生で挫折まで行くとちょっと辛すぎるかなと思っただけで、失敗程度でいいのかなと思ったんですが、やはり高校の時に挫折も大事だなと、その時に適切なアドバイスをどうやってかけてやれるかっていうことで、大人の責任かなと思っただけで、私が担任を持っていた時の経験を思い出したのは、ある高校を落ちて私が勤務している高校に来た子がいました。その子の最初の保護者面談の時に母親が来たんですが、母親が私に言ったのは、息子がある高校を落ちた時に父親の関わり方が情けなかった。子どもが今どうしていいかということん落ち込んでいる時にどう接してくれるんだろうと思っただけで、接してくれなかったというのがあって、子どもが挫折した時こそ、ピンチをチャンスに変えるという言葉がありますけど、そういう部分なんだろうなというのが頭をよぎりました。学校も優秀な先生が多いので、きっちり計画を立てて、分きざみで計画が行くんですが、破綻してもいいんじゃないかという余裕が無い、それを私たち教育行政側が厳しくチェックしてるせいもあるかもしれないんですが、失敗できるからこそ学校だと、子どもたちがいろんな失敗をしてそれが経験、成功体験ばかりよりは失敗体験を積み重ねて、自分で自立していく時に学んでいけるかなと、使い古された言い回しですが、親は先回りしすぎる、私たち教育現場も先回りしてないかなと。

私、中高一貫校に勤務した経験があるんですが、その時に中学校から来た先生に言われたのが高校の先生は大雑把ですねと言われて、その大雑把感では中学生は動けないですよと言われて、私からすると中学校の先生が手をかけすぎじゃないかという印象もあって、もっと放っておいてもいいんじゃないかというような、学級崩壊を良しとするわけではないですし、授業管理は別なんですけど。そういったことを今のお話を聞きながら思っただけで、やっぱり失敗できる環境も大事にしていきたいというのが、今伺っていて強い思いです。そして、それを大人の責任と覚悟ですね。覚悟の方が無いとたぶん失敗を受け止められない、そこを見て行きたい。それをこちらでも覚悟を持っていきたいと思っただけで。

あと、市長のおっしゃった付加価値のある教育、すごく大事なキーワードかなと思っただけで。市内の高校の教員をずっとやっていた時に、進路に向けて個人面接すると必ず言うんですね、伊達は気候が良いと。だから、私は伊達の気候が良いのは努力した結果でも何でも無い、考えなければならないのは、その次だよとずいぶんした記憶がありますが、やはりこのすばらしい環境をきちんとベースに持ちながら、どのように持続可能にしていけるかという事もあるんですけど、その中でどういう教育活動ができるかというのをもう一度原点に戻って見つめなければいけないかなと思っただけで。学校現場の生活も長くて、今

こういう仕事もしていて私自身が教育以外知らないで来ていますから、そういうふうに考えた時に委員さん、保護者もそうですが、色々聞いても、それきっと上手くいかないと思う中で組み立てるんですよ。そこをリセットしていかないと最近特に思いました。私自身も職員や学校現場に言うんですけど、できないことの言い訳はもしかしたら自分の頭の中にあるかもしれない。それをもっともらしい行政的な説明も踏まえながらしていくことで、大人の押し付けという風に先程表現いただきましたけれど、それにきつとつながっていることもあるのかなと改めて思い知らされた気持ちがあります。

◎堀井市長

皆さまから他にご意見ありますでしょうか。

◎早瀬委員

先程、子どもたちが決めるというような話がありましたけれど、私が高校の時に、高校生だったからかもしれないですけど、生徒会に年間例えば何十時間という時間が与えられるんですよ。そして、行事を生徒会が決める、マラソン大会にするのか、遠足にするのか、学校祭はと。中学校で可能かどうかはわかりませんが、生徒会の子たちに年間の行事何十時間を自由に決めていいよと、それを生徒同士で話し合っ決めて決めるのか、そういう小さな体験というか、そこで失敗、成功、達成感を感じていくのが自信につながっていくのかなと思いました。

◎平田委員

市長が外から見られた伊達市の教育というのはどのようなものでしょうか

◎堀井市長

表面上しかわかっていないところもあるので何ともいえないところもありますが、学力調査の結果等もいただいて拝見させていただきましたけれども、平均的な学力の状況かなと、伊達らしいというか尖ったものはあまり無いのかなという思いがありました。

◎平田委員

学力を目指したい子どもを持つ親御さんは、小学校を卒業した段階で引っ越してしまいます。確かにおっしゃるとおり平均的な部分があるんですけど、この先付加価値をどのように付けていくかというのが、だて学も含めてなかなか上手くいっていない部分があるなと思っていますし、現状、伊達がどんなに好きだとしても仕事が無ければ帰ってこれないということもありますし、伊達の産業も大事だと思うんですけど、帰ってこなくても伊達の事を思っていてくれるとか、そういう部分ではいろんなアイデアを聞かせていただければと考えています。

◎堀井市長

私も付加価値と言ったんですけど、表現が難しいところですが、他には無いオンリーワンというか、伊達で子どもを育てたいとか、子どもも伊達に行きたいと思うような教育ができたらいいなと。本当に教育はまちに定住したいという思いと、私の経験上ですけど、とある所で、いろいろなアンケートを取らせてもらった時に、定住意向の高さとどういった施策に対するポジティブさが相関してるのを見た時に、教育って結構高いんですよ。教育って無形のもんですけど、教育が高いイコールまちのブランドというか価値というか、そういったところを感じる傾向にあるのかなとを感じる事もあったので、教育ってすごく大事ななと、付加価値という言葉を使わせてもらいました。

◎早瀬委員

なかなかグラフには付加価値とか出てこないですよ。伊達で言えば、例えば緑丘高校

を卒業した彫刻家が生まれたり、演劇家だったり、映画監督だったり、そういうことが、伊達って人口が少ないけど文化度が高いまちなんじゃないかっていうような付加価値というのは今もある、ただこれを持続していくというのは大変で、今開来高校に力を入れていきますけれども、そういう数字とか表には表れないものが必要なのかなと思います。

◎堀井市長

芸術や文化が盛んですし、文化度の高いまちだと思うんですね。それを継承するのも大事ですし、育むような体制も大事だし、そういうまちだということを外に対して見せていくというのも大事だと思います。見せることで外の人に知ってもらってというのもあるんですけども、もっと言えばインナープロモーション、自分達の自己肯定感とか自分達の自信を高めるっていうのが大事だと思います。

◎影山教育長

私が教育長になったばかりの時に、本当に各学校いろんな取組をやっているんですけど、報道に情報提供していないんですね。それでとにかくどんな小さな事でも良くて、報道の方が来るか来ないかは報道の方の考え方なんだから、学校が考える必要の無いことで、とにかくどんどん情報提供してください。それからだんだん新聞に取組が出てくるようになって、学校側に定着してるのかなと思ったのですが、やはりそうすることによって学校が取組を確認することと、改善につながっていくし、自分達のことを客観的に見られて評価をしてもらえたんじゃないかとなって、肯定感につながるという、それはたぶん自信につながっていくことになるのかなと思っています。

あと、付加価値って聞いていて思ったのが、先日美唄市の教育長と話していて、美唄市はふるさと教育を農業に特化させたんですね。市長の思いもあつたらしいですが、元々農業地帯ですから農業に特化して、とにかく農業に関わることでガツガツやるという。そういう特化型のやり方もあるというのを見て、美唄はかつて炭鉱の町だったけれど、今は人口も少なくなって農業でやっていこうとしていて、それを学びにつなげているんだなという印象も伝わってきたりとかすることもあるんだなと思いました。

だて学の部分で言えば、まだ結果は見えていないですけど、私のイメージにあるのは小学校中学校って義務教育課程の中でやはり教育課程の組み方も一定程度決まりが強すぎて、やりにくいところがあるなと思ったのですが、高等学校は校長の裁量の部分がとても大きいので、伊達開来高校で言えば、普通科単位制ということで、非常に柔軟な教育課程が組めるようになっているものですから、そこで必修で2単位、週2時間だて学を入れてもらったのは非常に重要な意味があつて、そこは3年生だけということではなくて、1年生2年生のところでは総合的な探求の時間の中でやったり、教科横断でやったりして、それを3年生で開来高校としてはゴールということにしているんですね。そこでゼミ形式でやってもらっているので、生徒の希望に応じていろんな課題を作つて、グループが数名ずついて、そこに指導者が張り付くような形でゼミを作っていくと。生徒の希望を聞いているので、毎年いろんなことが変わっていく可能性があつて、それがおもしろいと思っていました。

そうすることによって、今の子どもたちの目線から伊達らしさが出てくる可能性があるかなと思っています、いつも我々が考える時に子ども目線を捨てて考えがちのところがあつて、こうやったら子どもたちが良くなるんじゃないかと。子どもたちに聞いたかと言われると、聞いていませんと謝る感じなのですが、それを開来高校に期待していて、開来が望んでいるのは、それを小中学校のだて学なり、他の教育活動の中に自分たちが入って、一

緒にやっていきたいというのが開来高校側にも実はあって、その循環ができると伊達のオリジナリティとなって、この循環ができるまでには7～8年かかると思います。実はイメージの目標にはあって、そこにつなげてあげられればいいかなという思いがあるものですから、いろいろところで教育委員の皆さんや市長はもちろんなのですが、提案などいただければと思います。

◎岩本委員

小中高の先生方の交流の場も必要になるし、高校のゼミ形式が小学校中学校に行くのはすごく面白い取組だなと思います。あと、先程の付加価値の話で言うと、東京に20何年いて、子どもが小2の時にこっちに帰ってきたのですが、こちらは病院の先生が少なくて若い先生を派遣してくださいという話をしたら、こちらに来てても子育てができない、教育が悪いところには行ってくれないと言われました。教育格差が医療格差につながってしまうので、結局、それがこのまちの魅力の低下につながってしまうので、最初に我々が手を出すのは教育かなという思いはあって、こちらに大学を目指せる塾が無くて、それを教育長が聞いてくださって、開来高校に予備校が入ってくれて、いい方向に来ているので、それが大学を目指せる授業ができる外部が入ってきたのは、すごくうれしいことだなと思います。

◎堀井市長

それはすごく大事で、私も全く同じ課題認識で、だからこそその付加価値だと思うし、病院の先生が来てくれないというのにつながるし、そこが本当に大きいと思います。ですので、大人の責任と覚悟で作った学校に自信を持って子どもに行ってほしいと思える学校を作らないとだめだと思います。

他にご質問、ご意見はございませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

◎堀井市長

それでは、協議第1号につきましては、以上のとおりとしたいと思います。

以上で、本日の日程はすべて終了いたします。

◎水野企画財政課長

これをもちまして、第12回伊達市総合教育会議を閉会いたします。

閉 会 （16時00分）